

第二のものは研究された写本のリストである。それと違って三番目と四番目は、ギリシア語またはラテン語の原文による事項索引である。本著が明らかに示しているように、用語の意味がよく変わるものがあるが、コンテキストを考慮して確認する必要はしばしばある。そのために最後の二索引は貴重な助けとなりうる。

残念なことには文献目録が欠けている。ほとんど700ページの厚い本をさらに厚くしないためであったかも知れないが、まことに残念なことである。というのは、脚注に挙げられる参考文献が極めて豊富なものであるから、整理した文献目録にまとめられていれば、研究家にとって大いに参考になったろうからである。

Elisabeth Gössmann: *Antiqui und Moderni im Mittelalter,
Eine geschichtliche Standortbestimmung*

München-Paderborn-Wien, Verlag Schöningh, 1974 (Veröffentlichungen des Grabmann-Institutes zur Erforschung der mittelalterlichen Theologie und Philosophie, herausgegeben von Michael Schmaus, Werner Dettloff, Richard Heinzmann, Neue Folge 23) pp. 158.

加 藤 信 朗

「昔」と「今」, 「新」と「旧」を区分するということは、それがどのような時代に行なわれるにせよ、——無自覚であっても人は常時それを行なっている——それ自体一つの問題を含みうるものである。ゲスマン夫人のこの新著は、この歴史意識の基柢に潜む分別の所作が中世人の意識の中でどのように成されていたかに著目し、Cassiodorus (ca. 485-580 後), Beda Venerabilis (672/3-735) から14-15世紀の *Devotio Moderna* に至るまで、ほぼ千年に亘る全中世期の各時期、各文化層における主要な動きを追い、着実な文献学的操作を用いて、中世人の内におけるこの現代意識 (Modernitätsbewußtsein) の多彩な表出——それは *modernus* と *novus* の二語によって表出される——を浮彫りにし、同時に、中世全期を一貫するこの歴史意

識に見られる或る種の共通性、あるいはむしろ、この歴史意識を構成する一貫した力動連関とでもいうべきものを抽出することに成功している。これは西欧の歴史意識の基柢に関わることなのでわれわれには興味深いものである。modernus, novusの二語の多様な用法、微妙なニュアンスの相違の指摘に止まらず、各論点においてこれを上述の問題意識から分析している点、そこから、当然、modernus, novusの二語が顕在していなくても、同じ歴史意識の見られるところ（たとえば、antiquiに対する nos）を取上げている点は夫人の業績の特徴と言えよう。ただ、扱われている範囲が余りにも広大であること、原資料それ自身が、もしも、未公刊の写本類をも加えるならば、この百数十頁の小冊子によっては到底、尽されえない範囲のものである故、先人の研究成果 (Freund, Spörl, Chenu, Curtius 等) を援用するのは当然のことであり、また、必要不可欠でもあったと思われるが、これら先人の諸研究に著者の負う所と著者自身の研究の独自性の境界が著作自体からは必ずしも常に明瞭に読み取れないのは残念である。他方、豊富に渉獵され引用された関係諸文献はこの複雑多岐な問題相に読者を導き入れるための良い手引きとなろう（ただ、第六章、後期スコラ論理学に関わる章で引用、援用されている文献 (Prantl, Ritter) はこの領域に関する今日の研究の進展の状況からみる時やや古いのではないかと思われる。また、このような領域では文献学を越える専門知識が要求されるのではないかという危惧もある)。また、本書は、随所に附された注を精読することによって、益されることの多くなるような性質の豊かさを備えた書物である。

冒頭に掲げた問題は、大雑把に言えば、次のように整理することが許されよう。「昔」、つまり、「曾って」と「今」は〔I〕(i) まず極く自然に、単純な「時間における先と後」——この「後」にわれわれ自身が位置する——を意味するだけのものでありうる。ただし、この場合でも、「昔」と「今」の境界をどこに置くかは全く多様でありうる。(ii) 次に、これに価値評価が加えられ、一方に肯定的価値、他方に否定的価値が付されることがある。「進歩」と「頹落」の観念が機能するのはここである。「栄光の往古」に対して「末世」を啣ち（または、戒しめ）、「悲惨な過去」に対して「現代の開化」を謳歌するが如きはこれである。しかし、このような「古え」と「現今」という対による時間把握は、西欧のみならず東洋にも、一般に、人類の文化の営みのあるところ必ず見出される時間把握の類型であるが、この「古」と

「今」の緊張を、とりわけ、原始文明から爛熟、頽廢に至るまでの文化の諸階程を経た古代文明 (Antike) とロマン・ゲルマン諸族の歴史への登場と共に始まる新しい世界 (Moderne) とから合成される複層構造として把握されるヨーロッパ世界 (トレルチ) において、その文化構造に生成論的に内在する本質契機として把握するところに著者の見解はあり、この点では、著者はトレルチに根本的には賛同していると思われる。そして、ここに中世を一貫する中世人の時代把握があり、「古人 (Antiqui)」「今人 (Moderni)」という対概念によって把握されるものの典型がそこにあったということを書き示している。これは、さらに、キリストの受肉に全き「新しさ (novum)」を見るキリスト教信仰によって独得な彩色を蒙り、そこからみずからの生きている時代を「新生の時」と見るか、それとも、本来、あるべきものに比して「頽落の時」とみるかのずれが生じ、これによって、この広義の「新時代 (modernum)」そのものの内に、新しい緊張と分裂を作り出すことになる (これは次の問題点に接続する)。[Ⅱ]ところが、ここにヨーロッパの歴史把握におけるもう一つの顕著なタイプがある。それは、この「古」と「今」の緊張の中間に、「中間の時代」、つまり、*media aetas* を挿入する歴史把握であり、そこに、古代、中世、近代の三時代から成るものとしてのヨーロッパ史の時代区分が生ずる。この西欧の把握は19世紀において支配的であり、それはステレオタイプ化されてわが国の一般教育には今もなお強い影響力を持っている。ところで、*media aetas* 自身はみずからを「古」と「今」の中間にあるものとして位置づけたわけではないのだから、これは近代、通常、文芸復興期に端を発する近代人の歴史意識に淵源すると考えられる (ヘーゲル、ミシュレ、ブルクハルト、ディルタイ)。暗黒時代中世 (ペトラルカ) と対比してイタリア文芸復興期を近代の端緒とみなすブルクハルト的な文芸復興期の位置付けに対しては戦後、50—60年代に歴史学者によって反論が加えられ、今日、学者の間ではこの19世紀的な西欧把握はもはやいかなるドグマでもなくなっていると思われるが、この三時代構成による西欧把握の原型と淵源については必ずしも一定した解釈があるとは思われない。この点についてゲスマン夫人の本書における論究は一つの明澄な視界を開いてくれるように思える。それは、中世人の歴史意識に内在する「古」と「今」、「往古」と「現時」という緊張はおのずと「今」、「現時」の把握の内にこれをさらに二極に分極化してゆく反省的な力動を宿すことを本

書が明示してくれているからである。(著者はこれを必ずしもこのように明言しているわけではないが、著者によって呈示された中世人の歴史把握の内に、これは明示されている)。すなわち、「現時」は範型としての「往古」に対比せしめられる時、「現時」に直接に先行する時代を頽落として捉え、「現時」を「進歩、革新」——これは同時に「復古」の意味を持つ——とするか、あるいは、「現時」を頽落として捉えることによって、「未来」に来るべき良き日の到来を祈念する——この「未来」は終末論的なものとしては「現時」に臨在することもある——といういずれかの方向に向う力動を反省として内蔵するからである。このように「今」が反省として持つ二極分化の力動性の中世期における多彩な現象形態を本書はさまざまな実例によって明示している。さて、このような視界の内に置いてみる時、イタリア文芸復興期を暗黒の中世に対比して近代の端緒とするかの19世紀の西欧史観は実はヨーロッパ史の端緒から反復されていた類型的な歴史把握の一つのリフレインに過ぎないものになることは見易いところであり、これをドグマ化することは許されず、他の脈絡を繰るところに当然これとは異なる歴史把握が生じること、そして、ヨーロッパ史における歴史把握の一般的類型の中では、「今」の絶えざる老朽化 (Verjährrbarkeit des Modernen) ということの方がより基本的な性格であるという帰結が生ずるであろう。

以上述べて来たところは本書の内容の紹介というよりは、本書が志向している基本の事柄であり、本書を読んで考えさせられるところであると言うべきかも知れない。ただ、本書がそうした一つの透徹した視向をもち、そうした問題意識によって貫かれているところに本書の魅力と特徴はあり、その独創性の境界が何処にあるかというようなことは、おそらく、著者にとっては、中世の学究の多数にとってと同じようにどちらでも良いことなのであろう。

終りに、私自身の問題意識から見て、本書によってまだ適切な解答を示唆されなかったことを数点附記したい。(1) 西欧を古典古代 (Antike) とロマン・ゲルマン諸族の登場と共に始まる新しい世界 (Moderne) から成る複層構造として捉える見方はわれわれ東洋人の眼から見る時或る面では極く自然に受け入れやすい見方であると同時に、他の面では、別の分り難さをもつ見方である。受け入れやすいのは19世紀的な三時代把握よりもそれが遙かに分り易く、事実に適合しているからである

が、分り難いのは、古代文明を古典古代としてそのように一義的に捉えること
 のいわば観念性のゆえにである。現実には、古代社会は遙かに複雑、多様なものであ
 ったし、したがってそれとの関係も複雑でありうるし、他方に、ロマン・ゲルマン諸
 族にとってもその固有の古代との関わりがあるではないか（ゲスマン夫人の労作で
 は、Freund の労作にのっとり、Thietmar von Merseburg [975-1018] にとって
 は異教時代のザクセン人が彼の本来の *antiqui* であって、黄金時代としての *anti-*
quitas はオットー大帝の時代に関係づけられている事実が挙げられ、これを「中世
 における注目に値する *antiquitas* の使用例」と呼んでいるが (p. 37) この点への一
 層の追求は無い)。この点における近代西欧人 (本書の意味での *moderni*) の、いわ
 ば、「故郷喪失 (*Heimatlosigkeit*)」から西欧の歴史意識の内に一種の“ひずみ”が
 生れて来ているように他処目には見えるのであるがどうであろうか。(2) 上記のよ
 うな複層構造として西欧を捉える時、「キリスト教古代」がもつ両義性をどう処理
 したらよいのであろうか。つまり、キリスト教古代は一面において *antiquitas* であ
 ると同時に、他面において、その福音の故に *novitas* である。そして、この *novitas*
 のゆえに、「古」に対する「今」の端初はどうしてもそこに置かざるを得なくなる。
 これが中世に行なわれた多数の歴史解釈の典型となったことは本書でも叙述されて
 いるところだが、これはあの複層構造としての西欧把握の枠には収まらないのでは
 ないか。つまりは、これも *antiquitas* の観念性から来るので、キリスト教古代の
現実性の把握が西欧において何処か欠けるところがあつたのではないかとこれも他
 処目には見えるのである。(3) 第三に、本書の範囲を逸脱することではあるが、東
 方教会の歴史把握はこれと同じだったのだろうかということである。(4) 最後に、
 ブルクハルト流の三時代把握を排棄するとしても、著者は現在どのような時代把握
 が現代 (*tempora nostra*) にとって適合したものとして考えておられるのか、この場
 合、近代科学の成立は中世的な世界把握との関係においてどのように位置づけられ
 るのかということがある。これらはすでに本書のテーマを越える問題ではあろうが
 筆者にはみずから問わざるを得ない問題として迫ってくるのである。